

障害児体育のここ 10 年ぐらいの大阪が果たした役割

辻内 俊哉

同志会の全国大会で障害児体育分科会が設立されたのは 1973 年の白浜大会の時です。刀根山で院内学級の担任をしていた土佐さんも参加されていたようです。それからほどなくして大阪でもプロジェクト研究活動が盛んになり、「認識発達プロジェクト」が発足しました。当時の大阪支部「教育課程研究」を追随する中で、「ちょっと並べてみた表」の認識発達プロジェクト版を作っていました。昔、三局会議の後、よく武藤さんと一緒に帰っていましたが、「0 歳からの運動文化」ということをいっぱい聞かされた（いえいえ、教えて頂いた）記憶があります。「運動文化」の解釈にはいろいろな視点があり、私の頭ではぼんやりしたイメージしかなかったのですが、根底に流れる熱いものは残りました。

私はその当時、とにかく「体育で何を教えたらいいのか」原理的なものを追求したくて、しばらくは球技プロジェクトにお世話になっていました（山本まあさんと船富さんはしょっちゅう言い合いをしていて、とても面白かったです）が、全国の障害児体育分科会は、兵庫の大宮さん、埼玉の塩井さん、大阪の竹内さん、武藤さん、小池さんたちが中心になって活躍していました。全国の障害児体育分科会と大阪支部は太いパイプでつながっていたのです。

「認識発達プロジェクト」はそのあと「障害児体育プロジェクト」に名前が変わりましたが、理由はあまり覚えていません。しかし、そのころ大きな出来事が起こります。支援学校は専門性が必要なため、今まで府の直轄人事はありませんでした。それが、支援学校も直轄強制人事の対象になったのです。

竹内さん、小池さんをはじめ、自分の勤務校に誇りを持ち、「定年まで勤めよう」と決意していたベテラン勢が一斉に「強制異動」の対象になりました。小池さんも定時制の高校に勤務することになり（人事のヒヤリングで、違う支援学校に行く可他の子どもたちに情が移るから、思い切って一般校に転勤させてくれ、と言ったそうです。竹内さんも違う学校に違和感を感じ大学の教員になられました）、結果的に障害児体育プロジェクトは風前の灯だったと思います。その危機に、淡口さんや上田富男さん、榊原さんが一般校から支援学校に転勤してきました。新たな顔ぶれで新たな研究が始まります。淡口さんや上田さんは、支援学校に転勤してもいつまでもチャレンジャーで、いろいろな取り組みを引っ下げプロジェクトに参加してくれました。また、当時から問題意識の高かった榊原さんは「ワロンの理論を学習しよう！」と問題提起してくれたのですが、私たちの頭はワロンの理論についていけませんでした。

ワロンの学習こそ頓挫しましたが、榊原さんは常に発信をし続けました。「アフォーダンス」の学びは障害児教育にとって「灯台下暗し」でありつつ、実は障害児教育の原点に通じる先人たちが無意識に取り組んでいた教育技術の一つでした。榊原さんは「たのスポ」でアフォ

ーダンスの特集を組み、同志会はいち早くアフォーダンスの理論を取り入れることができたのです。

榊原さんはアフォーダンスの理論と時期を同じくして、ヴィゴツキーを紹介してくれました。「発達の最近接領域の理論」何となく聞きかじってはいましたが、この理論が、私や障害児体育分科会、引いては健康教育プロジェクトにも大きく影響を与えました。

障害児体育プロジェクトでは「発達の最近接領域の理論」の本を読破し、健康教育プロジェクトでは「教育心理学講義」の本を多数の人を巻き込み、上野山先生が頑張っていました。

そんな時期に私に「輝くシリーズ」の出版の話が舞い込みました。「アフォーダンス」や「発達の最近接領域の理論」をその本でも紹介することができました。障害児体育分科会の理論と実践の一つのトータルラインができたと思っています。本が発行されたのは2005年冬のことでした。

この本がベースとなり、近年の障害児体育分科会は私か大宮先生が基調提案を担当しています。でも、私が「アフォーダンス理論」を中心とした「わかる・できる」という方法論の域を出ないまま、大宮先生は「その子どもにとっての教材の意義」と運動文化論に真っ向から迫っています。さらにいっそう彼女から学ばねばと思う、今日この頃です。

不完全ながら大阪支部障害児教育プロジェクトの歩みと課題を紹介しました。原稿依頼を受ける中で、初めて、このプロジェクトが長い歴史を歩んでいることを実感しました。だからこそ、最後に近況を報告したいと思います。

近年の障害児体育プロジェクトでは、誰も体育の授業を持っていません（笑）。メンバーの中で体育の授業を担当する人がいなくなったからです。プロジェクトでは体育にこだわらず、実践を持ち寄ったり、困っている子どもの事例を共有しようというものです。それでも人は集まります。その理由は「子ども理解から実践をスタートさせよう」という原理で参加者が学びに来るからです。

そして、そんな集団を束ねているのが今は奈良ブロックの北門さんです。実は、牧野さんと私と北門さんは和歌山大学器械体操部の仲間でした。長い月日を経て再びつながることができ、今や北門さんがみんなに呼びかけ、まとまる要の役をしてくれていることに運命を感じています。

原稿依頼は「障害児体育のここ10年ぐらいの大阪が果たした役割」でした。今までの取り組みが集大成され、ヴィゴツキーとアフォーダンスの理論とセットで確固たる発信ができるようになったことが長続きの理由と考えています。そして、北門さんを中心とした新たなまとまりが今後の発信に向けての基盤づくりになっていると思うのです。